

令和 5 年度
成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業
広島訪問報告書



成 田 市

成田市平和啓発推進協議会

<< 目 次 >>

[illegible]

○事業概要

【事業名】

成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業

【目的】

市では、昭和 33 年に「世界連邦平和都市」を宣言するとともに、戦後 50 年目を迎えた平成 7 年には、「非核平和都市」を宣言するなど、平和啓発活動を進めている。戦後 80 年近くが経過し、戦争を体験した方が年々少なくなる中、その貴重な体験を風化させることなく、次世代に引き継ぎ、平和の大切さを伝えていくことが課題となっていることから、市内の中学生が被爆地を訪問し、直接、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどを学び、その感想や成果を多くの市民に伝えることで平和啓発を促進させるものである。

【訪問先】

原子爆弾の被爆地であり、原爆資料館のある広島市・長崎市のうち、本年度は広島市を訪問するものとする。

【日程】

令和 5 年 8 月 4 日（金）～8 月 6 日（日）

【使節団の編成】

- (1) 団 員…市内の公私立中学校（11 校）から 1 名ずつ推薦された 11 名とする。
- (2) 随行員…市教育委員会教育指導課職員 1 名、平和啓発推進協議会員 1 名、市文化国際課職員 1 名の合計 3 名とする。

【団員の責務】

団員は、本事業に関連する行事をはじめ、事前・事後研修会に出席するとともに、被爆地訪問において被爆者からの体験講話を聞き、被爆遺構や被爆関係資料館等の見学などを通じて、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどを学び、訪問後に感想文等を市に提出しなければならない。

また、被爆地訪問の成果を学校内や市の行事等で発表することにより、多くの市民に平和の尊さを啓発するものとする。

【実施経過】 令和 5 年

5 月 12 日（金）	各中学校へ団員の推薦依頼
7 月 2 日（日）	結団式・第 1 回事前研修
7 月 21 日（金）	第 2 回事前研修
7 月 27 日（木）	出発式、第 3 回事前研修
8 月 2 日（水）	第 4 回事前研修
8 月 4 日（金）～6 日（日）	呉市、広島市を訪問
8 月 17 日（木）	事後研修、報告会
8 月～11 月	各学校での報告会

【使節団】

令和 5 年度成田市中学生折り鶴平和使節団の構成は次の通りです。

○ 中学生

学 校 名	学 年	氏 名	備 考
成田中学校	2 年	丸川 大智	
遠山中学校	2 年	高橋 奨玄	団長
久住中学校	2 年	福田 優衣	副団長
西中学校	2 年	早乙女 奏大	
中台中学校	2 年	齋藤 優成	
吾妻中学校	2 年	伊藤 ひなの	副団長
玉造中学校	2 年	松本 美咲	副団長
公津の杜中学校	2 年	尾崎 天音	副団長
下総みどり学園	8 年	大屋 勇翔	
大栄みらい学園	8 年	高木 彩夏	
成田高等学校附属中学校	2 年	新 優依	副団長

○ 随員

成田市教育委員会教育指導課	稲葉 尚子
成田市文化国際課	齊藤 衣純
成田市平和啓発推進協議会	飯田 和宏／山崎 孝典

○活動内容

【成田市中学生折り鶴平和使節団結団式】

7月2日（日）、成田市中学生折り鶴平和使節団結団式を実施しました。



【事前研修】

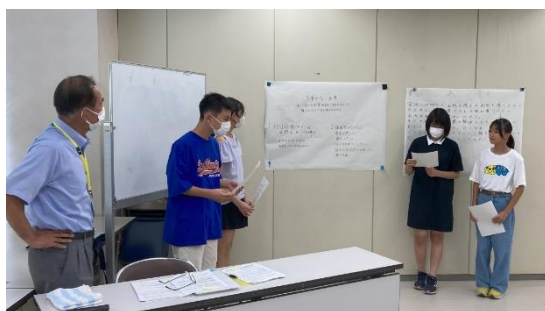
原爆についての学習や被爆体験者のお話を通して、知識を深め、被爆地訪問に向けて準備しました。

第1回 7月2日（日）事業の概要、原爆とは、被爆体験講話（木村 美子さん）



木村さんのお話は、普通の日常がどれだけ幸せかを感じられるお話でした。戦争の悲惨さや原爆投下時の状況など、本当は思い出したくないことを、未来につなげるため、私たちに丁寧に話してくださいました。（福田 優衣）

第2回 7月21日（金）戦争と平和について考える、千羽鶴の標語作り、見学先調べ



グループで特攻隊員の心情や、戦争と平和、わたしたちができることについて話し合うことで、自分以外の新しい考えを学ぶことができました。このことから、他の人の考えを知ることが大切だと感じました。（福田 優衣）

第3回 7月27日（木）出発式リハーサル、見学先発表

第4回 8月2日（水）平和朗読会・オンラインとうろう流しへの参加

【千羽鶴収束作業】

市内 11 中学校の全生徒をはじめ市民から平和への祈りを込めて折られた鶴が寄せられ、成田市平和啓発推進協議会の方々を含むボランティアの手により、千羽鶴に収束されました。47,000 羽が被爆地に届けられ、この 15 年間で被爆地に献納した折り鶴は 1,509,850 羽になりました。

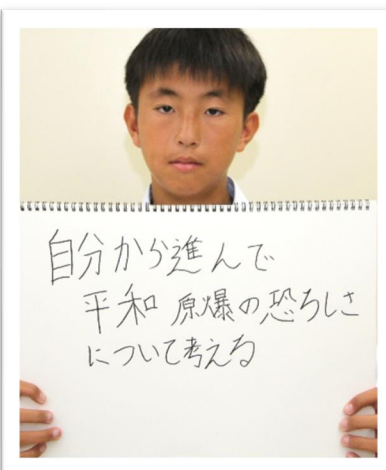
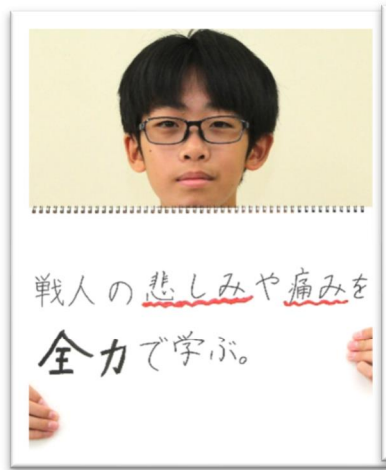
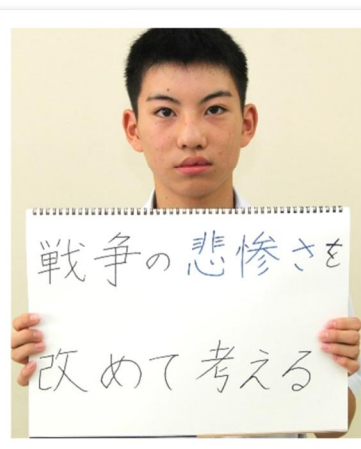
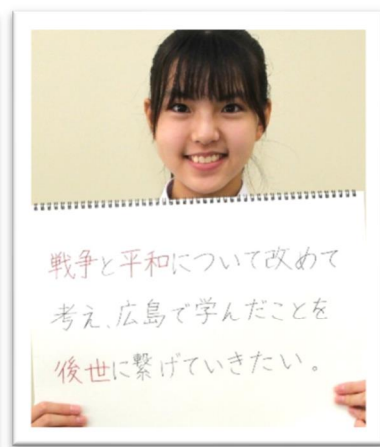


【折り鶴平和使節団・千羽鶴出発式】7月27日（木）庁議室

市内中学校の生徒らが平和への祈りを込めて折った鶴がヤマト運輸株式会社の協力により被爆地である広島と長崎に送られました。また、各団員が、成田市長、成田市議会議長らの前で、広島で学びたいことや体験したいことなどの抱負を述べました。



<広島訪問に向けた抱負>



○広島訪問

【行程】

- 8月4日 (金) JR 成田駅 集合
品川駅 発
広島駅 着
大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）見学
本川小学校平和資料館見学
原爆ドーム、爆心地（旧島病院）見学
ホテル着、夕食
ミーティング
- 8月5日 (土) ホテル 発
原爆の子の像へ千羽鶴を献納
ボランティアガイドの案内による平和記念公園見学
昼食
「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加
広島平和記念資料館見学
ホテル着、夕食
ミーティング
- 8月6日 (日) ホテル 発
平和記念式典に参列
広島駅 発
JR 成田駅 着
成田市役所 着・解散

8月4日（金）

6:15

JR 成田駅集合

駅にて出発の挨拶を終えた後、電車で広島駅に向け出発。

6:44～

JR成田駅～品川駅（のぞみ17号）～広島駅（車内で昼食）

12:35



13:35～

14:50

大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）見学



大和ミュージアムには、10分の1で再現した戦艦ヤマトや本物の兵器や弾薬が展示されていました。また、戦艦ヤマトや呉市の歴史についての話を聞きました。

本物の特攻兵器や戦闘機を写真で見ると迫力を感じました。

僕は戦争の歴史をあまり知りませんでしたが、大和ミュージアムに行って戦争について学ぶことができました。（大屋 勇翔）

16:30～

17:20

本川小学校平和資料館見学



僕は本川小学校資料館にあった1枚の写真が心に残っています。その写真には78年前の元気な本川小学校の子どもたちが授業を受ける様子が写っていました。そんな笑顔があふれた、小学校も原爆によって無差別にも焼け野原となってしまいました。そこに展示されていたガラス瓶や自転車の部品も原爆の衝撃を教えてくださいました。僕は、ここで原爆の怖さだけでなく、日々の生活のありがたさを学ぶことができました。(高橋 奨玄)

17:30～

17:45



相生橋、原爆ドーム、爆心地（旧島病院）見学

相生橋は、広島に原子爆弾が投下された時の目標にされたと言われていす。とても特徴的で珍しいT字型の橋に加え、主要軍事施設から近いということもあり、ここへめがけて落とされました。落とされた原子爆弾は300メートル離れた島病院上空で炸裂しました。爆風は欄干を押し拡げ、北側に川に落下させ、水面からはね返って歩道の一部を持ち上げました。また、相生橋付近にいた人間は高熱線を浴び、衝撃波によって吹き飛ばされ多数が即死してしまいました。後には、火傷から逃れ川まで避難してきてきた被爆者が力尽き、息途絶えた死体が累々と横たわっていたそうです。

想像するだけで私は心がとても痛みました。(新 優依)



原爆ドームは、爆心地から 160m という至近距離で被爆し、現在でも残っている貴重な建物で、世界遺産の一つです。ドームは、白や黒に変色し、壁や屋根、階段から窓枠まであらゆる所が崩れていました。さらに、ガイドさんが「被爆前は今の 3 倍ほど大きい建物で、中にいた方は即死してしまった。」と、おっしゃっていて、一瞬でこれだけの物と命を奪ってしまう原子爆弾は絶対にこの世にあってはならないものだと言っていました。

(松本 美咲)

爆心地である島病院は、78 年前原爆が投下されるまでは一般の方々が利用する普通の病院でした。原爆投下後、病院は跡形もなくなり、そこには壁の一部やドアが残っているだけでしたが、今では以前と同じ場所に再建されました。

私はそこから、この建物は、原子爆弾を受けても諦めずに復興へ向けて前へ進み続けた広島の人々を映しているのではないかと考えました。

(尾崎 天音)

18:00～
19:50

ホテル帰着

徒歩でホテルに戻り、夕食後、本日の反省と翌日の千羽鶴献納の準備をしました。



8月5日(土)

8:25

朝食後、平和記念公園へ移動

8:35

原爆の子の像の下で、千羽鶴を献納



9:00~

平和記念公園見学

10:45

2グループに分かれ、ボランティアガイドとともに公園内を見学しました。



平和記念公園は、世界恒久平和という願いを込めて爆心地に近い場所に建設されました。園内には千羽鶴を献納する原爆の子の像や世界遺産に登録されている原爆ドーム、毎朝原爆投下した8時15分に鳴る平和の時計塔など平和に対するさまざまな建物がありました。3日目に行われた平和記念式典も園内にある原爆死没者慰霊碑で行われました。公園に実際に行ってみて、平和は当たり前ではなく幸福であることを改めて学びました。(福田 優衣)

原爆の子の像は、広島で被爆し白血病によって10歳で亡くなった佐々木禎子さんをモデルにした原爆で亡くなった子供達のための慰霊碑です。像の下に書いてある慰霊文には「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための」と書かれています。慰霊文を実際に読んで、私たちが平和を築き、繋げていかなければならないという責任感を感じました。(高木 彩夏)

被爆アオギリは、原子爆弾の熱線や、爆風を浴びたにも関わらず、2本が奇跡的に助かりました。戦争の恐ろしさを示すのは、建物だけではなく、自然の植物も、戦争をしてはいけないというシンボルだということを知りまし

た。さらに、アオギリの歌を聴き、世界中の平和を願っている歌詞だと思いました。(齋藤 優成)

平和の鐘の表面には、3つのマークが書かれていて、1つ目は国境のない世界地図、2つ目は原子力のマーク、3つ目は原子力のマークの反対側にある鏡です。これらはすべて平和を表しています。平和の鐘の前には水が張ってあり、蓮の花が咲いていました。原爆投下後に水を求めて亡くなった人々を供養するためのものです。僕はこの国境のない世界地図が訴えているように世界中の人々が一つになるよう思いを込めて平和の鐘を鳴らしました。

(丸川 大智)

11 : 30～

12 : 20

昼食（ひろしまお好み物語駅前ひろば内 そぞ）



13 : 30～

16 : 45

ヒロシマ青少年平和の集いに参加

原爆被害の概要説明、被爆体験講話を聴き、「あなたにとって平和とは」「なぜ核兵器はあるのか」をテーマにディスカッションを行いました。

被爆体験者・笠岡貞江さん：12歳の時、爆心地から3.5km離れた自宅で被爆。



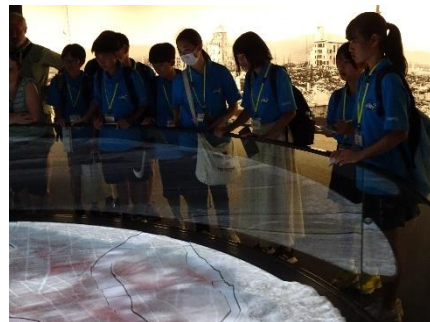
青少年平和の集いでは、全国から集まった、小中高大学生とディスカッションをしました。ここで話した『自分にとっての平和とは』と『核兵器がなぜ無くならないのか』というテーマについて、意見が大きく2つありました。1つは核兵器がない世界が平和という意見。もう1つは、今の世界の様な核兵器を自己防衛に使い平和を保つ核抑止の意見。両方とも納得できますが、ロシアの様に言葉だけだとしても脅す道具に使う国が後々出てきてしまうなら、核抑止とは異なりますし、保有することで、脅すことができてしまう核兵器はやはりあってはならないものだと思います。(新 優依)

私は青少年平和の集いで笠岡貞江さんがおっしゃっていた「1人じゃなくても、みんなで考えればきっとできる。」という言葉がとても印象に残っています。核兵器廃絶のために誰か1人が動くのではなく、みんなで同じ目標へ向かって進んでいくことが大切なのだと思います。そのために私たちが今できることを考えていき核兵器廃絶へ向けて一歩ずつ進んでいきたいと思います。(尾崎 天音)

17:40～

18:55

広島平和記念資料館を見学



平和記念資料館には、家族に残した手紙や日記、実際に特攻隊員が着ていた服など、多くの資料や遺品が展示されていました。日記が8月5日で終わっていたり、送られた手紙がその家族の最後の会話になったりと、本当に過去に戦争があったのだと感じさせる展示が印象的でした。ここに展示されている物は、「2度と戦争を繰り返してはいけない」という被爆体験者からのメッセージだと思います。(伊藤 ひなの)

19:35～

20:30

ホテル帰着

徒歩でホテルに戻り、夕食後、本日の反省と最終日に向けた確認と意気込みの発表を行いました。



8月6日（日）

6:50

ホテル出発

7:15～

平和記念式典参列

8:50

平和記念式典では被爆者への弔い、そして世界が永遠に平和であることを日本人だけでなく世界のさまざまな方が祈りました。式典では、新たに亡くなった4,000人近くの方の名簿が慰霊碑に納められました。原爆というものは何十年経っても人々を苦しめる恐ろしい物だと改めて感じました。式典の中で、自分とはあまり年齢が変わらない子どもがスピーチをしていて、自分も原爆の悲惨さ、平和への願いを多くの人に発信できるのではないかと思います。（早乙女 奏大）



9:45～

10:10

路面電車で広島駅に移動



12:43～

18:28

広島駅（のぞみ26号・機内で昼食）～品川駅～JR成田駅

18:50

成田市役所 着・解散



【事後研修】

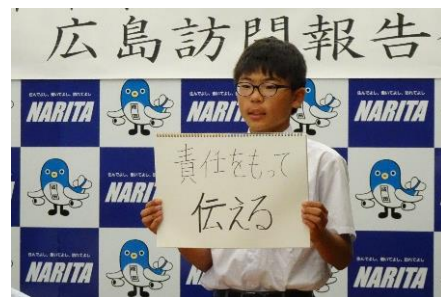
事後研修では、各団員が広島訪問中に「見て、触れて、感じた」ことをまとめ、平和の尊さを伝える「広島訪問報告会」に向けた準備に取り組みました。

8月17日（木） 報告会準備、アンケート

○報告会

【広島訪問報告会】8月17日（木）庁議室

報告会では、3日間の訪問で「見て、触れて、感じた」ことと、その体験を今後どのように生かしていきたいかを発表しました。最後に、教育長から講評をいただきました。



＜広島で感じた「自分の想い」～私にとっての平和・私にできること～＞



僕が平和のためにできることは、責任を持って伝えることです。なぜ伝えることを大切にしていきたいかというと、今後の未来へ原爆、戦争の恐ろしさを知る人

が少なくなっていくからです。この過去を二度と繰り返さないために、伝えるという小さなことから大きな平和を作っていきたいです。



平和のために私ができることは、他者への理解を深め、思いやりの心を持つ、ということです。私は広島でさまざまな意見を聞き、平和とは他者の立場や思いを

はせ、みんなが理解しあうことだと考えたからです。そのために今私ができることは、まずは自分から思いやりの心を持って生活していることだと思いました。



私が平和のためにできることは、過去を知り、平和とはどんなものか、どんな貴重なものなのか理解し、平和について次世代に繋げていくことだと思います。私

は派遣に行って様々なことを学び、沢山の知識を増やすことができました。「平和」もその1つです。現在私たちは何の争いもなく平和に過ごしており、それを当たり前だと思ってしまうことが多いと思います。私は、過去を知ると、当たり前ではなくとても貴重なものだと思いました。この学んだことをしっかりと次世代に伝えて、平和が当たり前ではないこと、貴重であることを伝えていきたいです。



平和のために自分ができること、それは、学んだことを次世代に受け継いでいくということです。戦争というむなしい出来事が起きた過去は変えることはでき

ませんが、未来に生かすことはできます。この派遣を通して戦争のことをより深く学んだ私たちには、戦争を後世に伝えていく使命があります。戦争は命の奪い合いであり、大切な家族や明るい未来までも奪います。今、私たちは戦争とは無縁の日々を過ごしていますが、それは決して当たり前ではなく、恵まれた幸せなのだとこのことを改めて感じました。



私にできる平和は、さらに学び、思いを伝えることだと思います。私が広島へ学びに行き、一番強く思ったのは、まだまだ学ばなければいけないことがたくさんあるということでした。

これからさらに戦争、平和について学び、広島で感じたたくさんの思いを伝えることが、私にできる一番の平和だと思いました。



私は平和や戦争について、知り、考え、伝えることで、未来を繋いでいきます。被爆の実相を知る人が減りつつある今、私たちのような若い

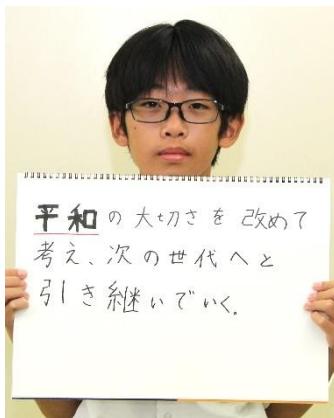
世代が平和や戦争について理解を深め、それを多くの人に伝えていくことがとても重要です。二度と世界が戦争や核によって苦しむことがないように、私たちが平和を築き、未来へつないでいきます。



私が今できることは、広島で感じ、学んだ過去を未来につなげる、広める、ことだと思います。広島でいろいろな人の意見や説明を聞いて、ひとりひとりの平和への思いが伝わり、私も広島

の方々の気持ちをつなげたいと思いました。そこで私はまず、学校の友達や家族など、身近な人から広めていこうと思います。現地でしか味わえないことなどを伝え、みんなに興味を持ってもらいたいです。「広島県や長崎県のことだから、遠いし、私、僕には関係ない」と思っている人が、日本という規模で自分事と捉え、考えてもらうきっかけに、私がなりたいなと思います。





僕は、平和の大切さを改めて考え、次の世代へと受け継いでいきます。平和の大切さを改めて考えれば、今、平和に生きていることが当たり前

前ではない、もう一度平和について深く考えることが必要だと思ったからです。「戦争があった」だけではまた、何年後かに後世の人が戦争を起こしかねないので、次の世代へと引き継いでいくこと、戦争で起きたことなどを伝えていく必要があると思います。僕は二度と戦争を起こさないために家族をはじめ、周りにいる友達を大切にし、みんなが笑顔で過ごすことから始めていきます。



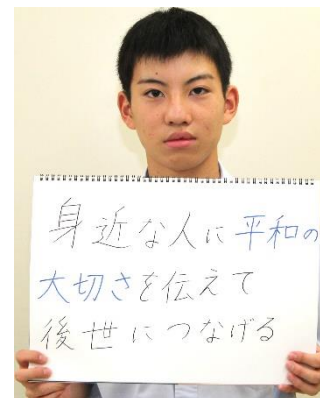
僕ができることは、広島で「見た」、「聞いた」だけで終わらせないということです。広島に行って終わりではなく、平和についてよく考え、たくさんの人に平和

のありがたさ、原爆の恐ろしさについて話していきたいです。



僕は家族や友達に、今の世界にある核兵器、戦争の悲惨さを伝えます。これから二度と戦争や核を使わず、悲惨さを後世に伝え、今、生活できていることのありが

たさを知ってもらうことが必要だと思うので、悲惨さを後世に伝えていきます。



僕が平和のためにできることは、身近な人に平和の大切さを伝えて、後世につなげることです。僕は、身近な人に伝えていけばたくさんの人が平和の大切さに気付くことができ

ると思います。また、それを後世に伝えていけば、今よりも平和な世界が訪れると思います。

【学校報告会】

派遣団員となった生徒たちは、それぞれの中学校において、被爆地を訪問して学んだことを自分の言葉で先生や他の生徒たちへ報告しました。

成田中学校	10月23日（月）
遠山中学校	10月13日（金）
久住中学校	11月21日（火）
西中学校	10月16日（月）
中台中学校	11月16日（木）
吾妻中学校	9月1日（金）
玉造中学校	10月28日（土）
公津の杜中学校	9月25日（月）
下総みどり学園	11月11日（土）
大栄みらい学園	10月24日（火）
成田高等学校附属中学校	8月25日（金）



【派遣団員の報告】

広島派遣を終えた後、派遣を通して感じた事や平和への思いが派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

私たちにできること

遠山中学校 2年 高橋 奨玄

1945年8月6日8時15分、アメリカ軍によって広島に世界初の原子爆弾が投下されました。そのたった一発の原子爆弾によって、およそ350,000人の人が苦しめられ、亡くなりました。その原爆を他人事として捉えていませんか？今もなお、ロシアによるウクライナ侵攻が続いています。それは、あの闇の兵器がもう一度使われる可能性があるということです。そこで、私たちは1人でも多くの人の笑顔を守るために広島で原爆について学びました。

まず1日目に行った本川小学校平和資料館では、実際に被爆したものを見ることができました。ガラス瓶などは形さえも変わってしまい、とても飲み物を入れるとは思えないガラスの塊に変わっていました。また、ガイドさんの話によると原子爆弾によって死んでしまった人の死体は、本川小学校のグラウンドに大きな穴を掘って埋めたそうです。その時代は油が貴重だったため油を使ってすぐ燃やせませんでした。周りは死体の嫌な臭いが漂っていたそうです。石灰を巻くと臭いが収まるので死体の上に学校にたくさんあった石灰を撒いたそうです。そのせいで、後から建物を建てるために穴を掘ると死体を焼いたあとの黒と石灰の白の層が見えたそうです。また、地下にある部屋でガイドさんが原爆で生き残った清子さんの話をしてくれました。僕はその話が特に心に残りました。その話によると原爆が落ちた瞬間は、周りが急に黒に染まり、沈黙が生まれたと言っていました。外に出ると目玉が飛び出て自分の目玉を大事に大事に持っている人、内臓が飛び出ている人、近くの川に飛び込んでいった人がいたそうです。その光景はまるで地獄のようだったと話してくれました。昨日まで元気だった友達が黒い姿をしてこっちにやってきたらと、考えるだけでゾッとします。こんなことが78年前の広島では本当に起こっていたそうです。

2日目には、平和記念公園を見学しました。まず、原爆の子像(佐々木禎子さん)の近くに折り鶴を奉納しました。その後平和の灯を見ました。この灯は平和記念公園にできて1度も消えていないそうです。雨の日も台風の日も消えないそうです。一つだけその灯を消す方法があります。世界の核爆弾を全てなくすことです。僕は、この灯を消したい(この世界から原爆をなくしたい)と心から感じました。平和記念公園には水が所々にあります。その理由は被爆した方に水を捧げるという思いが込められています。原爆ドームを見に行きました。この原爆ドームは昔は産業奨励館と言って外国から来たものを置いておく場所だったそうです。この産業奨励館は大変賑わっていたそうです。たった一発の爆弾によって瓦礫の山となってしまいました。今でも、その崩れた瓦礫が残っています。

原子爆弾はこのように広島にたくさんの被害をもたらしました。それによって人々は食

べるものがない、住む場所がないという貧しい生活になりました。もう二度とこのような被害を起こさないために私たちにできることは「伝えていく」ことです。今後戦争のことを知る人が少なくなっていくます。このことは、未来に語り継いでいかなければなりません。1人でも多くの人に戦争を知ってもらうため、僕は周りの人たちに広島で感じたことを「伝えていく」という小さなことから大きな平和を創っていきたいです。

過去を知り未来へ繋げるために

久住中学校 2年 福田 優衣

1945年8月6日8時15分広島に原爆が投下されました。78年前上空から視認しやすいT字の形をしていた相生橋を目標に現在の島病院の上空600メートルでさく裂し約3000～4000度の熱線と爆風や放射線を受け当時広島で暮らしていたほとんどの人々の命を奪いました。

皆さんは「戦争」に対してどう思っていますか？多くの人は「怖いもの」「やってはいけないもの」という考えが多いのではないかと思います。では、「戦争」についてはどうでしょうか？詳しく知っていますか？現在、戦争経験者の平均年齢は85歳以上と高齢者が多く戦争の悲惨さを伝えることが難しくなっており、戦争や原爆の悲惨さを知っている人が少ないのが今の現状です。

私は成田市中学生折り鶴平和使節団の一員として3日間広島に訪問し、戦争について考え、自分なりの答えを出そうと思い学習してきました。

1日目は本川小学校平和資料館を見学しました。本川小学校平和資料館では広島全体の模型を見ながら説明を聞きました。原爆が落とされた時の状況を模型を見ながら説明していただきとてもわかりやすかったです。印象に残っていることは被爆で亡くなられた方の遺体が小学校の校庭に集められ、焼かれていたという事実です。広島の学校の多くは、校庭で遺体を焼いていたそうです。そのときの「におい」がきつく、学校にあった石灰を撒いたそうです。本川小学校の校庭には7層の地層となっており、現在も人骨や遺品が見つかることがあるそうです。校庭に遺体があることを思うと、とても辛かったです。

2日目は平和記念公園の原爆の子の像で千羽鶴の献納、ヒロシマ青少年平和の集いで平和について意見を共有し平和記念資料館で被爆した時の実際の服や植物を見学しました。印象に残っていることは2つあり、1つ目は平和記念公園にある原爆の子の像で鶴を献納したことです。私は学校で折った1人1人の想いが詰まった千羽鶴を献納してきました。献納するときにはすでに沢山の千羽鶴が献納されて献納できるスペースが無いくらい献納されていて、鶴はきれいで沢山の人の平和への想いが詰まっていてとても感動しました。2つ目は平和記念資料館で展示物を見学したことです。資料館では後遺症の写真などの展示品を見たり被爆前と後の原爆ドームの模型を触ってみたり貴重な体験ができました。印象に残った展示物は三人の中学生の遺品です。爆心地から900メートルにいた3人の中学生が身

につけていた帽子・ベルト・学生服が展示されてました。見た目はすごくボロボロで学生服の袖は焼かれて無くなっていていました。ズボンは布が剥がれていて、帽子も焼け跡が残っていました。服に見えないほど焼けていて心に残りました。

3 日目は平和記念式典に参加しました。平和記念式典では内閣総理大臣や各国の代表の方や他の県の派遣に来ていた人など大勢の人達が参加していました。式典で印象に残ったことは 2 つあります。1 つ目は、広島代表小学生の平和への誓いです。1 つ 1 つの言葉から平和への思いを一つにしようという想いがとても伝わりました。2 つ目は 8 月 6 日 8 時 15 分原爆が投下された時間に平和の鐘が鳴ると共に黙とうをしたことです。式典にいる全員で 1 分間黙とうをしました。78 年前この日この時間に落とされたことを感じながらする黙とうは、いつもする黙とうと違ってより重く感じました。投下された場所、日、時間と共にした黙とうは絶対に忘れてはいけない体験だと思いました。そしてこの日に原爆が落とされたこと改めて実感できました。

私はこの 3 日間を通して実際の展示物や原爆経験者の話や平和記念式典に参加して戦争や原爆について沢山の知識と沢山の人の平和に対する思いを学びました。私の考える「戦争」や「原爆」とは沢山の人を犠牲にするだけで何の意味のないことだと思います。戦争で何も罪のない人間を巻き込み、ただ人が沢山亡くなり結果的に得られたのは「不幸と地獄」。誰も幸せとは感じません。戦争は人を殺し合ってるだけの無意味な行動だと思います。私も訪問する前は戦争や原爆について「怖い」くらいしか考えられませんでした。「戦争」や「原爆」は「怖い」なんて一言で終わらせてはいけません。ボロボロになった服、崩れてしまった建物、家族、自分の皮膚や眼球……。色々なものを失った、そんな地獄を「怖い」という言葉ひとつでまとめてはいけません。

過去を変えることはできませんが未来は変えることができます。二度とこのようなことを起こしてはいけなし、忘れてはいけません。戦争や原爆で生き残ってくれた方がいるから今私達は平和に生きています。私達にできないことなんてありません。私達にも役割があり「戦争」や「原爆」について伝えていくべきです。そのためにも私達は「戦争」や「原爆」について興味を持ち、知ろうとすることが大切です。私は、「戦争」や「原爆」の過ちをしっかり受け止め、経験してきたこと知り得た知識を未来に繋げていきます。

未来へ語り継ぐ戦争

吾妻中学校 2 年 伊藤 ひなの

成田市中学生折り鶴平和使節団として、広島での研修を終えました。広島で実際に自分の目で見たり、耳で聞いたりして、学ぶことがたくさんありました。多くの見学場所の中で、印象的だった場所が 2 つあります。

1 つ目は、本川小学校です。この小学校は原子爆弾投下の際、爆心地に最も近い学校として大きな被害を受けました。鉄筋コンクリートで作られた 3 階建ての校舎はほとんど残っ

ていませんが、校舎の一部を原爆の被害を受けたそのままの状態に残し、被爆の証として保存しているそうです。校舎は外部を残して全焼、壊滅し、校長先生のほか10名の職員と約400人の子供たちの尊い命が一瞬にしてうばわれました。原爆投下直後に、この小学校の生徒で奇跡的に生存できたのはたったの2人だそうです。大切な家族や友達を失った絶望感は何ほどのものだったのか、想像ができません。大きな悲しみを抱えても、自分が奇跡的に生き残ったのは、戦争を語り継ぐ使命があるからだと感じ、当時小学校6年生だったその生徒の1人は69歳の時に、語り部の活動を始めたそうです。戦争のことを思い出すのはとても辛いことですが、後世に繋いでいくために話をしてくれているので、今度はそれを私たちが受け継ぐ番だと改めて感じました。戦争を体験していない私たちが、このように戦争について深く学べるのは、被爆された方々の証言があるからです。この証言を決して無駄にせず、二度と戦争の起こらない世の中を作っていきたいです。

2つ目は、平和記念公園の原爆の子の像です。この像のモデルになった佐々木禎子さんは2歳の時に被爆し、10年後に白血病と診断されました。千羽鶴の意味を知った禎子さんは、「早く元気になれますように」という願いをこめて、亡くなる直前まで、薬の袋で鶴を折り続けていたそうです。8ヶ月の闘病生活の後、12歳で亡くなりました。禎子さんの死に衝撃を受け、立ち上がり、行動したのは禎子さんの同級生です。原爆によって亡くなった子どもたちのために慰霊碑を作ろうと、募金活動を始めました。全国の3,200余りの学校や、世界9カ国からの寄付などにより、1958年5月5日に完成しました。像の下に置かれた石碑には、「これは僕らの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきずくための」という碑文が刻まれています。原爆の子の像や、平和記念資料館を見に、広島まで来た外国人観光客が多かったように思いました。わざわざ足を運んでくれた人たちは、世界で唯一の被爆国である日本に関心を持ってきているのだと思うと嬉しかったです。

この広島への派遣を通して、戦争は二度と起こしてはいけないと改めて感じました。「戦争は本当に悲惨で、勝っても負けても地獄だ」と被爆された方が言っていました。被爆体験を語り継げる人が年々減っていますが、多くの方が亡くなって心と体に傷を負った事実はなくなりません。戦争のない、核兵器のない、平和な世界を作るために何ができるのか。私たちにできることは、戦争や平和について考え、過去の戦争と向き合うことだと思います。被爆した方の体験談を聞き、実際に広島を訪問した私たち使節団は、学んだことをたくさんの人に伝える使命があります。原爆が広島と長崎に落とされた事実は絶対に変わりません。同じ過ちを繰り返してほしくない、それが被爆体験者の願いです。その思いを私たちが多くの人に伝えることで次世代に繋ぎ、戦争を語り継ぎます。戦争は過去に起きた出来事、というだけで終わらせず、未来に生かします。これからの世界を作っていくのは、未来を生きる私たちです。戦争や核兵器によって生活が脅かされず、当たり前の日常が当たり前にある平和な世の中を作っていきたいです。

私は中学生折り鶴平和使節団として、研修を受けて広島へ行き、沢山の体験をして成田へと戻って来ました。そして改めて「戦争・原爆」と「平和」の二つについて考えました。

まずは「戦争・原爆」についてです。戦争・原爆とは何か？私は研修を受ける前はこう考えていました。「絶対に繰り返してはいけない事で、怖い事。」この考えは浅はかで、甘い考えである事に研修を受けてすぐに気付きました。まず、木村さんの話を聞いた時に印象的だった言葉が一つありました。

「戦争と原爆は言葉では言い表せないほど酷いもので、生きていても死んでいても地獄。」この言葉を聞いた時、私はあまり深く考えていませんでした。その後、さらに沢山の話を聴く機会があり、話をする全員が同じ事を伝えていて、本当に驚きました。朗読会で語り部をしてくださった方、本川小学校平和資料館のガイドさん、平和記念公園のガイドさんなど全員です。そこで私は初めて、戦争と原爆の本当の怖さに触れました。「生きていても地獄という事はどういう事なのか？」広島で足を運んだ場所全てがその答えを教えてくださいました。本川小学校ではたった一人生き残った少女の話を聴きました。その少女はどんな気持ちだったのでしょうか？ついさっきまで一緒にいた同級生、大切な友達、先生、そして学校までもが自分だけを残して全て崩れ去るところを見た少女。どれだけ辛かったのか、私には想像することができません。想像すればするほど「自分だったら？」と考えてしまい、怖くなります。平和記念資料館では、沢山の展示物一つ一つが心に残り、目に焼き付きました。この展示物はほとんど生き残った遺族が提供していると聞き、すごく胸が締め付けられました。本当は誰にも見せたくないはずなのに、ずっと自分が持っていたい物なはずなのに、沢山の人の戦争・原爆について知って欲しいという思いから手放すことを決意しているのです。その強い思いを「怖かった」で片付けることは絶対にしてはならないと心から思いました。本当の事を言うと私は、どの見学場所でも最初に思った感情は「怖い」でした。「今すぐここから出たい。」「聴いているのが辛い。」心の隅には、常にこの思いがありました。しかし、そこで戦争・原爆について学ぶ事を諦めてしまうと、真実を伝え、広めていくことが出来なくなってしまい、そして何より自分が後悔すると思ったので、その思いを胸に仕舞い込み、「怖い」の先にある「一人一人の想い」も成田へ持ち帰ろうと決心しました。この経験は自分の人生にとっても大きな一歩になったと感じています。

広島訪問を終え、沢山の想いを持ち帰って来た今、改めて、「戦争・原爆とは何か？」それは、「沢山の想いと笑顔を奪い、全ての人に永遠に治らない傷を負わせたこの世に存在してはいけない物」だと私は思いました。

次は「平和」についてです。広島へ行って学んだことは、「今、この瞬間こそが何よりも大切な平和そのものである。」という事です。大切な友達、家族がいて、沢山食べて、遊び、学び、考える事のできる今の暮らしこそが平和だと思いました。この平和は、今までの沢山の犠牲の上に成り立っているということを忘れてはいけないと思いました。そして、世界に

はまだまだ毎日、武力・核使用の脅威に怯え、食べ物も無く、勉強も出来ない貧しい暮らしをしている人々が沢山いることも忘れてはいけません。世界中の人や生き物全てが安心して暮らす事のできる真の平和を実現するには、これから沢山学び、平和への願いを広げていくことが自分にできる最大限のことだと思うので、しっかりと実行していきたいと思いました。

最後に私は中学生折り鶴平和使節団として研修を受けたり、広島へ学びに行けたりして良かったと思っています。今回訪れることの出来た全ての場所の想いを途切れさせる事なく、沢山の人に伝えて、平和への「想い」を繋いでいきたいです。

戦争とは、平和とは

公津の杜中学校 2年 尾崎 天音

「この壁や屋根は原爆で亡くなった人のことを見ていた。」

これは本川小学校平和資料館のガイドさんが言っていた言葉です。原爆を体験した方が年々少なくなっている中で、その時あった建物は現在でも原爆のことを覚えています。私は被爆した壁や屋根を目の当たりにし、「戦争とは何か」「平和とは何か」を深く考え、戦争の恐ろしさ、原爆の悲惨さを伝えていかないといけないと思いました。

私が広島で感じたことは、現地に行かないとわからないこともあるということです。そう感じた理由は大和ミュージアム、原爆ドーム、平和記念資料館を見て、実際に自分の目で見るのと写真で見るのとは異なり、全く違う印象を受けたからです。

大和ミュージアムでは、特別攻撃隊員の制服や大日本帝国の旗が展示されていました。特別攻撃隊とは、必死あるいは決死の任務を行う部隊のことです。出撃した特別攻撃隊の多くが20歳前後の若者でした。特別攻撃隊で亡くなった若者は、戦争に勝って国を平和にすることや家族を守ること、日本を守ることへの強い志をもって大空に散っていったことを知りました。

原爆ドームは、広島県産業奨励館として広島県内の物産品の展示・販売をしていた建物です。78年前に被爆し、被爆の悲惨な思い出につながることから、取り壊しを望む声も多くなりました。しかし、1歳のときに被爆し15年後、白血病でなくなった少女の日記に「あの痛々しい産業奨励館だけがいつまでも、おそるべき原爆のことを後世にうたえてくれるだろう。」と記していたことから、人々の原爆ドーム保存の原動力になり、現在に至ります。原爆ドームからは、原爆で亡くなった方達の悲しさ苦しさ、絶望感を訴えているように感じました。

平和記念資料館では、佐々木禎子さんの折り鶴や被爆直後の絵が展示されており、この世のものとは思えないものでした。78年前に原爆によって全てを破壊されてしまった過去をもう二度とつくりたくない、つくってはならないと思いました。

私が広島で聞き、考えたことは「核兵器と平和は繋がっているのではないか。」というこ

とです。青少年平和の集いで、小学生から大学生までのたくさんの意見を聞きました。事前研修で考えた「平和とは世界中の人が明るく未来のことを考えられる」という考えから「当たり前」の日常を当たり前で過ごすこと」という考え方に変わりました。

私は戦争とは、人が人でなくなってしまう事、人の心に大きな傷をつけるものだと思います。戦時中、日本では自由を奪われ、戦場に駆り出され、地獄としか言いようがないと感じました。また平和とは、当たり前のことを当たり前でできること、勉強ができること、友達と笑い合ったり、ふざけ合ったりすることだと思います。今、当たり前のことが当たり前でできていることは、敗戦後も諦めずに日本の復興のため頑張ってきた人々のおかげであることを忘れてはいけなかったと思います。

広島へ行って、78 年前の広島で被爆し犠牲になった方々のやりきれない思いや悲しみが今でも残っているのではないかと考えました。どれだけ街が綺麗になっても過去に起こったことは変えられません。いつまでも人の心や建物に残り続けるのだと思います。この先も平和の尊さや、当たり前で過ごしていることは当たり前ではないことを忘れずに過ごしたいです。そして、核兵器を世界から廃絶するために私たちができることは「他者の立場の意見を取り入れ、理解し合うこと」から始まるのではないかと思います。

私達の当たり前を全世界の当たり前へ

成田高等学校附属中学校 2 年 新 優依

みなさんは「平和」と聞いて何を思い浮かべましたか。私は広島へ、これからを平和にする為に、伝えなければならない過去を正しく詳しく知る為に行ってきました。なぜなら、今まで具体的には知らなかった戦争や原爆投下について、何度かの事前研修を経て私が想像ができないほど、悲惨で地獄の様なものだと知り、この事は絶対に起こしてはいけない、伝えなければいけないと感じたからです。

私が特に印象に残っているのは、本川小学校平和資料館と平和記念公園、平和記念資料館です。今から 78 年前の 8 月 6 日午前 8 時 15 分、これから 1 日がスタートする、みんながいつもの様に、「おはよう」と笑顔で声をかけて合い、「行ってきます」「行ってらっしゃい」と明るい声が町に響いている時に原子爆弾が投下されました。そして、たった 1 つの爆弾によって、広島は町は一瞬にして焼け野原になりました。私と同学年の中学 2 年生は当時、空襲で町が燃え広がらない様に建物疎開をしていました。原爆投下で熱線や爆風を直接受け、放射線を浴び、ほとんどが即死だったという状況を想像すると、とても心が痛みました。本川小学校平和資料館は原爆が投下され残った校舎の一部を資料館として、原爆投下後の写真や被爆した物などが展示されていました。被爆後の教室は、壁や天井にヒビが入り、床は崩れ、落ちた壁の一部や窓ガラス、折れた窓枠など普段の生活からは想像ができない様な光景がありました。また、この頃 3 年生以上の児童は教職員と共に学童疎開へ行っており無事でしたが、原爆投下後に広島に帰ってきた児童 40 人の内、両親が揃っていたのは 1 人、

片親が 7 から 8 人、残りは両親ともになくなっている悲惨な状態でした。また、翌日から鉄筋コンクリートで出来ていたことにより建て残った数少ない建物で、臨時救護所となっていました。そして、運動場では多くの遺体が積み上げられ、一斉に火葬されていたそうです。展示されている写真にはとても説得力があり、言葉には表せない気持ちが込み上がってきました。そこでは、今の日常のありがたさやどれだけ幸せで恵まれているのかを改めて感じることができ、戦争がいかにしてはならないもので、どれだけ悲惨で恐ろしいものかを感じることができました。そして、翌日見学をした平和記念公園では、ガイドさんの説明をききながら園内をまわりました。平和記念公園は原爆が投下される前までは、映画館などがあるととても栄えた街でした。しかし、原子爆弾が落とされ、街並みも一瞬のうちに消え去ってしまいました。今の平和記念公園は当時残った建物のがれきなどと一緒に埋め立てており、埋め立てていない一部を展示している建物では、燃えた畳などが残っていました。その事を教えていただいた後、園内を歩いている時の自分の一步一步が重く感じました。また、この平和記念公園には平和に関する建造物が沢山あり、原子爆弾が投下された 8 月 6 日以外の毎朝 8 時 15 分になる平和の時計塔や、私達や全国から献納された千羽鶴があり、2 歳で被爆し約 10 年後に白血病と診断され 8 ヶ月の闘病生活の後 12 歳で命を落とした佐々木禎子さんがモデルの原爆の子の像や原爆投下後残っている数少ない建造物であり原子爆弾、戦争の恐ろしさを風化させまいと語りかけている様に感じ取れる原爆ドーム、平和を鐘をならした人の心へ響かせる平和の鐘、世界から核兵器が全てなくなったら炎が消える平和の灯などがありました。私の中で、平和への想いがより強くなり、核兵器をいち早くこの世界から無くしたいと思いました。次に、平和記念資料館の見学へ行きました。そこには今まで見たことのない写真や絵、展示物がたくさんありました。前までの何も原爆投下について知らなかった私が行っていたら、痛そうや可哀想など浅い気持ちで終わってしまいそうでしたが、被爆体験をした方の話を聞いたり、被爆した方がかいた詩を聞いたり読んだりした今の私にとっては、被爆した学生服や三輪車、お弁当箱など一つ一つの展示物に原爆投下によって亡くなられた方のもう二度と原爆投下繰り返さず、この世界から核兵器をなくすためにこの事実を沢山の人へ伝えて語りかけている様に感じ、伝えなければならないという使命感を感じることができました。私が今できることは何かを改めて考えるきっかけになり、今の生活が決して当たり前では無いことを感じました。

私はこの 3 日間で、原子爆弾投下についてや戦争について沢山の資料や話、説明を通して知りました。戦争は命などのあらゆるものの奪い合いであり、勝っても負けてもお互いにデメリットが大きく、起こってはならないものです。戦争が起こってしまったという過去を活かすためにも私が今できること、戦争や平和について積極的に興味を持ち調べてみたり、今回の派遣で感じたり、学んだり、自分が得たものを学校の友達や家族など身近な人から広めたりするなど色々あると思います。日本にはまだまだ沢山いる「広島県や長崎県の事だから原爆のことなんて、自分には関係ない」と考えている人が日本という規模で自分ごとと捉え、興味を持ってもらうためのきっかけに私になれる様、頑張っていきたいなと思いました。私達が今過ごしている当たり前を核兵器がなくとも過ごせ、全世界の人が当たり前と感じ

られる様に小さな事からコツコツと行動を起こしていきたいなと思います。

原子爆弾と平和

成田中学校 2年 丸川 大智

みなさんは原爆と聞いて 1 番最初に何を思い浮かべますか？それは人それぞれだと思います。どの人も大ざっぱなイメージしかないと思います。僕も最初は「恐ろしい物なのだなあ」くらいにしか思っていませんでした。しかし、成田市中学生折り鶴平和使節団として広島へ行き、さまざまなこと、物を「見て」「聞いて」「肌で感じる」ことができました。

まず、「原子爆弾」とはどのような物なのか。原爆による被害は大きく分けて 3 つあります。一つ目は約 3,000 度から 4,000 度の異常なほどの高温の「熱線」が放出されることです。鉄が溶ける温度は約 1,500 度、太陽の表面温度は約 6000 度とされています。このことを踏まえるとこの熱線の温度がどのくらいなのかが分かります。2 つ目は「爆風」です。爆心地では最大風速 440 メートルに達したとされています。周囲の木造建築は全て吹き飛び大きな被害を与えられました。また、飛ばされた木造建築の下敷きになってしまい、命を落とす人も少なくありませんでした。3 つ目は人間の目には見えない「放射線」です。放射線での被害が 1 番怖く、建物を通り抜けると言う性質があるので防ぎたくても防ぎようがないのです。生き延びた人には「原爆症」という後遺症が残り、その場で助かった人でも一生苦しまなくてははいけませんでした。僕はその苦しみは代々受け継がれ、まだ生まれていない子どもにまで被害や悲しみが伝わっていつてしまう残酷さを改めて知りました。

僕は第 1 回目の研修会で、3 歳の時に被爆した、木村美子さんの話の中で家族の話がとても印象に残っています。原爆でお母さんと妹が頭に怪我をしても諦めないで助け合いながら生きたということにとっても感動しました。助けに入ったお父さんが二次被爆で亡くなってしまうなどさらに辛いことがあったのに一生懸命生きてきたことを見習わなければいけないなと思いました。原子爆弾とは、人の命だけでなく人の幸せまで奪ってしまうものだということを知りました。僕が広島へ行き、1 番最初に心を揺さぶられたのは、青少年平和の集いでの「平和とは何か」を考える際に、意見として出てきた「失わないと気づかないもの」という言葉です。もちろん差別がない世の中や争いのない世の中なども平和の一つです。けれど、この意見は「失ってから気づいても遅い」と言う視点で平和を考え、僕には思いつかなかった考えでした。よく考えてみれば「空気」も平和の一つです。普段当たり前だと思っている空気がなくなったら人間や動物は呼吸ができません。この「失わないと気づかないもの」という言葉は「当たり前が当たり前ではない。」ことを教えてくれた言葉でとても心に残りました。

もう一つ僕が印象に残った言葉は平和記念資料館にありました。それは原爆で亡くなられた方々の遺品が展示されているところの 1 番はじめの場所に 1 人の少女の遺品とその子が言った言葉が載せられていました。そこには、「一生懸命やることは全て面白い」と書かれ

ていました。僕は泣き出しそうになりました。戦争中に食べるものはない、勉強したくても勉強できない、自由に遊びたくても遊べない・・・そんな時代にこんな素晴らしい考えを持っている人がいたのかと思いました。今の僕にはとても考えられないような感動する言葉でした。こんなにも良い考えを持っている人を無差別に殺した原子爆弾は絶対に許せないと改めて強く思いました。

僕は広島へ行ってきてこれから戦争を起こさないことはもちろん、自分が「見て」「聞いて」「肌で感じた」ことを後世へ伝えていきたいと思いました。同時に自分で平和とは何か、核兵器を廃絶させるためにはどうすれば良いかなどを考え地域の方や自分の周りの方へ原爆が、人の命だけでなく、人の幸せまでも奪ってしまうということを心に伝えていきたいです。また、僕は友達や周りにいる人たち、みんなが笑顔で毎日が過ごせるようにしていきたいです。

継ぐ

西中学校 2年 早乙女 奏大

原爆の悲惨さは、知っているつもりでした。今、考えればその考えは間違っていて、浅かな考えだったと思います。

僕が広島に行って思った事は、今の広島はとても賑わい、明るい、緑豊かな街ということです。78年前、広島に原爆が落とされ、75年間草木が生えないと言われた街でした。広島に落とされた原爆には、核分裂物質としてウラン235が使われました。濃縮したウランを核分裂の連鎖反応が始まる臨界量より少ない2つの塊に分けておき、原爆の炸裂により放出されたエネルギーは、TNT火薬16キロトンに相当します。全長3.05m、最大直径0.71m、総質量4,400kgで「リトルボーイ」と呼ばれた原子爆弾は、一瞬にして広島にいた多くの人の命を奪いました。

広島に行き、印象に残ったことは三つあります。

一つ目は広島平和記念資料館です。館内には被爆者の着用していた服などの実物が飾られていて、その中でもお弁当箱がとても印象に残りました。それを持っていた人は折免滋さんという方で当時、中学一年生で建物疎開をしているときに被爆し、亡くなりました。そのお弁当箱には当時珍しいお米・麦・大豆の混ぜごはんなどが入っていて滋さんは、お弁当を食べることをとても楽しみにしていたにもかかわらず、それを食べることが出来ませんでした。このお弁当箱と水筒は、骨になった滋さんの遺体を母親がを見つけ出したとき、遺体の下にあったものです。お弁当箱の中には、お米などが黒ずんだままの状態に残っていて驚きました。

二つ目は本川小学校平和資料館です。本川小学校平和資料館では実際に被爆した建物や当時の被爆状況が見れました。その中で僕が一番印象に残ったことは、本川小学校で生存した方の話です。普段通りに学校に行っていて、下駄箱で被爆をしました。先生に川に行くよ

うに言われ、川へ逃げようとしたら、黒い人のような何かを見つけました。それは、人でした。男の人か女の人かもわからなく、子供か大人かもわからなかったそうです。もし、自分がその場にいたら、本当に耐え切れないほどの恐怖、悲しみ、憎しみがあつたと思います。そして、奇跡的に生存できたとしても、「原爆症」という後遺症で苦しむことになります。原爆症は、放射能を浴びた体内で、がんを発症させ、数年後に亡くなってしまうこともあります。また、戦争というのは「心が病むこと。」「何も感じなくなってしまうこと。」だと聞き、原爆は、建物、人の体だけではなく心も壊してしまうと思いました。

三つ目は広島平和記念式典です。平和記念式典では原爆死没者への弔い、世界の平和が末永く続くよう願う式典です。式典では 100 を超える国が参列し、参加者は約 5 万人という多くの人が平和に対して強い思いがあると感じました。また、この式典で「自分にもできることがあるのではないか。」「平和を後世につなぐことはできないだろうか」と思いました。

日本は今、被爆者の平均年齢が 85 歳となり被爆体験の話を書くのが困難になってきました。そして、僕たちが被爆者本人から証言を聞くことができる最後の世代だと言われています。広島に行き見た被爆の建物、着ていた服、被爆者の話、全国の小学生・中学生・高校生・大学生と「平和」「原爆」について話したこと、全てを学校の人や、家族に伝えていきたいです。そして、より多くの人に原爆は恐ろしい物だということを知ってもらいたいです。

78 年前に広島で起こった真実を後世に語り継ぎ、核兵器をなくすために声を上げ続けたいです。誰一人として悲しむことのない世界にするために、周りの友達や家族の意見をしっかりと受け入れ、けんかや争いがないようにしていくことを僕の「平和」への一歩としたいです。

世界から核を無くすために

中台中学校 2 年 齋藤 優成

僕は、8 月 4 日から 6 日に広島を訪問しました。研修前や、訪問前は、「戦争は怖い」「原爆は多くの人の命を奪った」ぐらいのイメージでした。しかし、研修や広島訪問では、被爆者の話を聞いたり、戦争の様子などの映像を見たりする中で戦争は想像を遥かに超える怖さでした。

特に印象に残ったことは、原子爆弾の本当の恐ろしさです。原爆が落ちるまでは、広島の間は、家や店が多くありました。原爆は、相生橋の T の字を目標に落とされ、島病院の上空約 600m で原子爆弾が爆発しました。原爆投下後、すさまじい熱線と爆風で鉄筋コンクリートは押し倒され、街には家や木が無くなりました。また、被爆した人が、真っ黒に焼けてしまい、皮膚が爛れ、自分の友達や大切な人が誰なのか分からなくなるほどの威力がありました。広島は焼け野原となり、約 14 万人の命が無差別に奪われてしまいました。爆心地から一番近い小学校だった、本川小学校の平和資料館で清子さんの話を聞きました。彼女の証言の中で、小学校の前の川が被爆した人で埋め尽くされていたということが衝撃でした。原

爆ドームは、原爆が投下される前からあった建物です。原爆投下前は、今の3倍の大きさだったそうです。「この建物を壊すか、残しておくか」と意見が分かれたそうです。しかし、「この建物を残し、このような誤ちを2度と起こさない」という意味で、残すことになり、今も広島で平和を訴え続けています。そして、被爆した人々は、その時に生き残ることができても後遺症や心の傷が残りました。放射線で白血病になってしまったり、目が見えなくなったりと苦しみました。さらに、戦争に対する恐怖心、原爆症に対する差別もあって、78年たった今でもその苦しみは続いているのです。

広島訪問では、大和ミュージアムを見学し、「呉の歴史」や、「大和の特徴」、「近代化産業遺産」に登録された「ゼロ戦」、「10分の1戦艦大和」など日本の産業の近代化に貢献したものについて学びました。平和記念公園では、千羽鶴を献納しました。原爆の像は、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんがきっかけにつくられた像です。10年後に白血病と診断され、病氣と闘いました。禎子さんは、鶴を1000羽折ると病氣が治ると信じ、鶴を折り続けました。しかし、8ヶ月の闘病生活の後、短い生涯を終えました。禎子さんは、白血病で、自由を奪われてしまいました。戦争は、無差別に人の命を奪ってしまうことを改めて辛いと感じました。病氣が治ると信じ、鶴を折り続けた禎子さんは、とても気持ちの強い女性だと思いました。

平和記念公園で聞いたことすごいいったことは、マルセル・ジュノー博士についてです。マルセル博士は、原爆投下の影響を確かめるために外国人医師として初めて広島を訪れた人です。マルセル・ジュノー博士は、広島のものすごい被害を見て、広島への救援を要請して、1万人の命が救われたと言われています。もし、マルセル・ジュノー博士がいなければ、今の広島は、なかったと思います。

僕は、広島訪問を終えて、この3日間の体験をそのままにするのではなく、これから2度と戦争をしないこと、核のない平和な世界を作るために、誰もが平等で笑顔で生活できること、このことを友達や、周りの人に伝えていきたいと思いました。研修前から疑問だった「なぜ戦争で原爆が使われたのか」の答え、「戦争を終わらせるために使われた」のが本当に正しかったのかどうかをこの先も考え続けていきたいです。世界から核を無くすためには、全世界の人々が、核兵器の恐ろしさを知ることだと思います。一人では、できないことも、たくさんの人たちが声をあげれば、大きな力になります。僕は、これからの学校生活でも、自分の考えを少しずつ声にして相手に伝えていきたいです。

平和とは

下総みどり学園 8年 大屋 勇翔

みなさんは原爆を知っていますか？多くの人を知っていると思います。しかし、原爆の被害を詳しく知っている人は少ないと思います。そのためぼくは被爆者の平均年齢が85歳を超えて実際に被爆した人が少なくなっていることを知って後世に伝えていかないとイケな

いと思いました。

原爆には 11 トンの圧力がかかる爆風、皮膚が溶けるほどの熱線、遺伝子にも影響する放射線があります。爆風は原爆のエネルギーの 50 パーセントを占め、秒速 400 メートルの風で建物や人々を吹き飛ばしました。熱線は原爆のエネルギーの 35 パーセントを占め、落下中心地付近では鉄が溶ける温度をはるかに超える 4000 度まで上昇しました。放射線は原爆のエネルギーの 15 パーセントを占め、目で見えることはできず鉄の壁までも通り抜けてしまいました。ぼくは、研修の中で「原爆は生き残った人にも苦痛を与え続ける」という言葉が心に残りました。原爆で生き残った人は肉体的苦痛だけではなく、精神的苦痛と闘いながら生きていかなければなりません。また、それらは一生消えません。そして実際に広島に行つて印象に残った場所が三つあります。

一つ目は本川小学校平和資料館です。ぼくは「キヨちゃん」こと居森清子さんが無傷で生き残ったことを聞いてとても驚きました。なぜなら、当時本川小学校の校内にいて唯一生き残った児童だったからです。しかし、言い換えれば約 400 人の児童はキヨちゃん以外全滅してしまったのです。キヨちゃんの話によると、1 階の靴脱ぎ場に入った瞬間、ものすごい音とともに周りが真っ暗になりました。明るくなるのを待って、外に出ると見渡す限り火の海でした。キヨちゃんは、小学校の前を流れている本川に入り水に浸かって火がおさまるのを待ちました。本川には大やけどを負い水を求めた人々の死体が山ほど流れていたそうです。一命をとりとめたキヨちゃんはその後、がんを発症してしまいましたが、平和の大切さを伝えるため 82 歳まで証言活動を続けました。

二つ目は平和記念公園です。原爆が投下される前は映画館や旅館がありにぎやかな繁華街でした。しかし、原爆が投下され一瞬で町は破壊されました。その後、1949 年 8 月 6 日に公布された「広島平和記念都市建設法」に基づき、爆心地周辺を恒久平和の象徴の地として平和記念公園が建設されました。平和記念公園は埋め立てられて造られたため現在も地面の下には瓦礫や小さな遺骨があります。

三つ目は平和記念式典です。平和記念式典では過去最多の 111 カ国の代表が参加しました。そのため世界が核兵器について少しずつ考えていると思いました。しかし、現在ロシアがウクライナに侵攻しています。また、世界には 12,000 を超える核兵器があり、保有している国はロシアやアメリカをはじめ 9 カ国あります。そのため、ぼくは世界から核兵器が消えることはとても先のことだと思います。しかし、核兵器がなくなるように訴え続けることはできます。内閣総理大臣や広島市長、国際連合事務総長の話から二度と核兵器を使用してはいけないという強い気持ちになりました。

ぼくは実際に広島に行ってみて改めて原爆の恐ろしさ、平和の大切さを学びました。また、実際に原爆ドームや本川小学校などそのまま残っている建物を見て写真よりも迫力を感じました。核兵器を二度と使わない平和な世界を創るためにぼくができることは身近な人にこの中学生折り鶴平和使節団で学んだことを伝えることです。周りの人に伝えていけば、たくさんの方が核兵器の恐ろしさを知ることができます。そして、それは必ず核兵器を減らす第一歩になります。ぼくは平和とは笑顔が絶えなくて毎日が楽しいことだと思います。また、

国籍や宗教、性別などで差別がなくなれば、平和な世界になると思います。これからは、二度とこのような悲惨なことが起きないように自分にできることは何かを考えて生きていきたいです。

知って、考えて、未来へ繋ぐ

大栄みらい学園 8年 高木 彩夏

今から78年前の8月6日広島に1発の原子爆弾が落とされました。広島は街は焼き尽くされ、その年の12月末までには当時の広島市の人口の約半分に当たる14万人以上の人が亡くなりました。生き残った人も、長い間原爆症や心の病に苦しめられました。

研修の時に被爆体験講話をしてくださった木村美子さんは、原爆が落ちた時の様子を「ピカドン」という言葉で表現していました。「ピカッ」という強い光の後に、「ドンッ」という大きな衝撃があったそうです。「ピカドン」の一瞬で、何万人もの人々の命が奪われたことにとても衝撃を受けました。原爆症の話もしていただき、実際に世代を超えて原爆症に苦しめられた木村さんの話にはとても重みがありました。

その後も研修を重ね、原爆のことについては理解していたつもりでした。しかし、実際に広島に行って、自分が思っていたよりも遥かに凄惨な過去があったことを実感しました。本川小学校の被爆した校舎や、幹がえぐれ変色したアオギリ、平和記念資料館の遺品や手紙など、無言で戦争の愚かさを訴えかけるものは、私の心の奥深くまで届き、改めて戦争と平和について深く考える大きなきっかけを与えてくれました。一番心に残ったのは被爆アオギリです。爆心地から約1.3km離れた広島通信局に植えられていたアオギリは被爆して枯れ木同然となってしまいました。しかし翌年の春に芽を出し、人々に生きる希望と勇気を与えました。被爆しても生き抜いたアオギリの強さに驚きました。同時に、「沢山の人の勇気と希望を与えて、絶望から救ってくれてありがとう」という思いも湧いてきました。このアオギリ2世が私の学校にも植えられています。大きく育って、親木のように人々に勇気を与える存在になってほしいです。

広島は、もう2度とこのような悲劇を繰り返さないようにと、被爆遺構や語り部活動などを通して「ノーモア・ヒロシマ」と世界に訴え続けています。今年の平和記念式典には、111カ国の駐日大使らが参列しました。平和、そして「ノーモア・ヒロシマ」の思いは国を超えて共通しているのだと感じました。広島で感じたものを踏まえて、私の考える平和とは、「すべての人が未来に希望を持って生きていける世界」です。将来の夢を考えたり、楽しいことを想像したりできることはとても幸せなことなのだと思います。その日常が、全世界、すべての人にあるべきだと思います。

青少年平和の集いで被爆体験講話をしてくださった笠岡貞江さんは、話の最後にこう話してくれました。

「あなたたちのような若い世代に、未来の平和がかかっている。」

この言葉に、私はハッとしました。被爆者の平均年齢が85歳を超えた今、被爆の実相を知る人は年々少なくなっています。だからこそ私たち若い世代が過去を知ることは、平和な未来をつくることに欠かせないのです。まずは「知る」こと。そして、そこから明るい未来のために自分に何ができるのか考えていくこと。一人一人にできることは必ずあります。違いを認め合うことは争いを起こさないことに繋がります。

私たちの世代も、これから先の世代も「あの日」を繰り返さないために、知って、考えて、未来に伝えて、平和を繋いでいきます。

平 和 宣 言

78年前の原爆投下の日を、まるで生き地獄のようだったと振り返る当時8歳の被爆者は、「核兵器を保持する国の指導者たちは、広島、長崎の地を訪ね、自らの目で、耳で、被爆の実相を知る努力をしていただきたい。あの日、熱線で灼(や)かれ、瞬時に失われた命、誰からも看取られず、やけどや放射能症で苦しみながら失われていった命。こうして失われた数え切れない多数の人々の命の重さを、この地で感じてもらいたい。」と訴えています。

本年5月のG7広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証しになると思います。また、慰霊碑を参拝された各国首脳に私から直接お伝えした碑文に込められた思い、すなわち、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和を祈念する「ヒロシマの心」は、皆さんの心に深く刻まれているものと思います。こうした中、G7で初めて「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が独立の文書としてまとめられ、全ての者にとっての安全が損なわれない形での核兵器のない世界の実現が究極の目標であることが再確認されました。それとともに、各国は、核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立てるべきであるとの前提で安全保障政策をとっているとの考えが示されました。

しかし、核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということを直視し、私たちを厳しい現実から理想へと導くための具体的な取組を早急に始める必要があるのではないのでしょうか。市民社会においては、一人一人が、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有するとともに、個人の尊厳や安全が損なわれない平和な世界の実現に向け、為政者に核抑止論から脱却を促すことがますます重要になっています。

かつて祖国インドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いたガンジーは、「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」との言葉を残しています。また、国連総会では、平和に焦点を当てた国連文書として「平和の文化に関する行動計画」が採択されています。今、起こっている戦争を一刻も早く終結させるためには、世界中の為政者が、こうした言葉や行動計画を踏まえて行動するとともに、私たちもそれに呼応して立ち上がる必要があります。

そのため、例えば、私たちが日常生活の中で言葉や国籍、信条や性別を超えて感動を分かち合える音楽や美術、スポーツなどに接し、あるいは参加して「夢や希望がある」といった気持ちになれるような社会環境を整えることが重要となります。皆さん、そうした社会環境を整えるために、世界中に「平和文化」を根付かせる取組を広めていきましょう。そうすれば、市民の支持を必要とする為政者は、必ずや市民と共に平和な世界に向けて行動するようになると確信しています。

広島市は、世界166か国・地域の8,200を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民レベルでの交流を通して「平和文化」を世界中に広めます。そして、平和を願う私たちの総意が為政者の心に届き、武力によらず平和を維持する国際社会が実現する環境を作ることを目指しています。また、被爆者の平和への思いを世界中の若者に知ってもらい、国境を越えて広め、次世代に引き継げるようにするために、被爆の実相に関する本市の取組をさらに拡充していきます。

各国の為政者には、G7広島サミットに訪れた各国首脳に続き、広島を訪れ、平和への思いを発信していただきたい。その上で、市民社会が求める理想の実現に向け、核による威嚇を直ちに停止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一步を踏み出すことを強く求めます。

日本政府には、被爆者を始めとする平和を願う国民の思いをしっかりと受け止め、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たしていただきたい。そして、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年11月に開催される第2回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆78周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和5年（2023年）8月6日
広島市長 松井 一實

○平和都市宣言

世界連邦平和都市宣言

(昭和 33 年 10 月 31 日宣言)

成田市は、宗教観光都市として、世界連邦建設の趣旨に賛同し、自ら永遠の平和都市となることを決意し、全世界の恒久平和確立と人類の福祉増進に努力せんとするものである。

右宣言する。

非核平和都市宣言

(平成 7 年 2 月 21 日宣言)

世界の恒久平和は、全世界の人々の共通の願いである。

我が国は世界で唯一の核被爆国として、広島・長崎に原爆が投下されて本年で 50 年目を迎える。

我々は、被爆者の苦しみを全世界の人々に訴え、再びこの地球上にあの惨禍を繰り返すことのないよう強く望むものである。

このため、平和を希求する我々成田市民は、我が国の国是である非核三原則が完全実施されることを願い、全世界の人々と共に、核兵器の廃絶、恒久平和確立のためここに「非核平和都市」を宣言する。



「平和と繁栄の像」

世界連邦平和都市宣言の記念として昭和 33 年の旧庁舎完成時に寄贈された。



「成田市平和のためのメンヒル」

平和を愛する成田市民の心の象徴として平成元年に建立された。

令和 5 年度

成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業
広島訪問報告書

令和 6 年 3 月 発行

発 行 成田市

〒286-8585

成田市花崎町 760 番地

電 話 0476-22-1111（大代表）

編 集 成田市シティプロモーション部文化国際課

登録番号 成文 23-057